

日本ハーディ協会ニュース  
NEWS from THE THOMAS HARDY  
SOCIETY OF JAPAN



第88号 (2020年9月1日号)

発行者 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院人文学研究科内  
日本ハーディ協会 jimu.thsjapan@gmail.com  
編集者 宮崎隆義 takayoshi.miyazaki@gmail.com



(今村紅子氏撮影：ドーチェスターの街並み。2011年初秋。)

## *Far from the Madding Crowd* との関わり

松井豊次

トマス・ハーディ初期の代表作である *Far from the Madding Crowd* (1874) は、私が人生の転換点で何度か重要な関係を持ってきた作品です。まず、大学院の修士論文で取り上げた作品の一つが本作でした。『日本ハーディ協会ニュース』第87号(2020年4月1日号)で風間末起子先生も述懐されていますように (p. 3)、当時は翻訳を入手することなどまず不可能な頃で、ない英語力を振り絞りながら懸命に原作を解読していたことを思い出します。

それから10年以上経った1997年4月1日発行の『日本ハーディ協会ニュース』第41号に、「日常

生活の中でのハーディ文学」というタイトルの拙文を掲載していただき、ジョン・シュレシンジャー監督、1967年製作の映画版 *Far from the Madding Crowd* について言及させていただいたことがあります。この原稿を投稿させていただいた当時の『協会ニュース』の編集者井上澄子先生のご紹介で、内田能嗣先生が主催されるハーディ読書会に参加させていただくことになりました。当時高等学校の英語教員であった私が、高名なハーディ学者であられる大学の先生方と共にハーディの詩の勉強をさせていただくという幸運に恵まれましたことは、生涯忘れ得ない思い出となっています。第41号の編集者は、福岡忠雄先生でした。

さらに15年ほど経過した2012年、内田先生のご依頼で *Far from the Madding Crowd* の共訳者の一人にさせていただくことになりました。初めてお話をうかがったとき、あまりに急なお話で動揺しつつ私の胸をよぎったのは、大学院時代に苦勞して読んだ本作の原文の難解さでした。本作の英語は後期の作品のそれよりも難しいかもしれないという印象を持っていましたので、正直「大変なことになってしまった」と動揺を抑えきれませんでした。

私の分担は最終的に、第11章から第30章ということで落ち着きました。序章的な第10章までと、物語の展開から結びとをつなぐ大切な部分になりますので、ここで読者の方に投げ出されるようなことがあっては元も子もないと、非常な責任を感じました。そのため、内田先生に常日頃ご指導いただいている「できるだけかな文字を使った平易な訳文」を心がける一方で、研究の参考に供すべく「注」を詳しく付けるといふ工夫をさせていただきました。実は、翻訳作業中は「後注」のつもりで注を作成していました。最終的な調整の段階で余分な注をかなり削除していただいたのですが、ある読者の方からは少し注が多すぎて煩雑であるというご指摘もいただいております。一般の読者の方には、とりあえず注はある程度とばして読んでいただいてもよろしいのではないかと考えています。

本作はハーディの長編小説としては4作目となり、地元ドーセットとロンドンを行き来しながら創作された前3作に対して、ハイアー・ボックハンプトンの彼の生家で書かれたものです。そのためか、非常にローカル・カラーが豊かであるという特徴があり、地元の人にしか知り得ないような農夫たちの生活や風習、羊の病気治療や羊毛刈りのシーンなどが次々と描かれます。一方で絵画的な表現も多く、羊毛刈りがおこなわれる納屋に関するハーディの建築家らしい感覚を通して見た精緻極まる描写や、トロイの目もくらむような刀剣さばきのシーンなど、象徴主義的な手法も用いられています。またこれは、ハーディのどの作品にも言えることですが、登場人物の心理状態を文体で表すという特徴もあります。例えば、第29章のオウクがバスシバに農場経営について意見するシーンで、「いつだったか分かりませんが、あなたが逃れようとしなかった、あの難儀な事態になりますよ」と、独立した台詞が副詞的に使われて、オウクの混乱した興奮状態を強調している箇所がありますが、この文構造に気づくまでに、かなりの時間と勇気が必要でした。このようにさまざまな芸術的技法が駆使され、レスリー・ステューブンをして「散文の中に『詩』がある」と賞賛せしめた作品ですので、その特質を可能な限り反映させる訳文を心がける必要がありました。

バスシバや彼女を取り巻くボールドウッド、オウクそしてトロイといった主役級の登場人物に加えて、農夫たちが前面に押し出され、脇役ながらもハーディの小説の中で、おそらく最も重要かつ多彩な役割を与えられているであろうというのも、本作のもう一つの大きな特徴です。そこで問題になるのはやはり、農夫たちが話す方言の翻訳です。方言の翻訳は3名の共訳者の個性が最も顕著に現れる部分ですので、最終的な調整の段階で、清水伊津代先生に全体の統一をお願いすることになりました。

約6年の歳月を経て、*Far from the Madding Crowd* の新訳『はるか群衆をはなれて』が完成し、トマス・ハーディ全集の中に第4巻として加えていただきましたことは、私の人生のまた一

つの大きな節目となりました。劣等生の私を常に叱咤激励し支えてくださった清水先生、風間先生、高い次元からお導きくださいました監修の藤田 繁先生、内田先生、一大プロジェクトに果敢に挑まれ、トマス・ハーディ全集出版という偉業を成し遂げてこられた大阪教育図書社長 横山哲彌様、そしてスタッフの皆様、お世話になりましたすべての方々に、この場をお借りしまして心から御礼申し上げます。

この新訳『はるか群衆をはなれて』が、全集の既刊作品ともども、末永く多くの読者の皆様にあいされ、ハーディの魂と触れあう一助となりますように、切に願っています。

## テキスト編纂の文法—ケンブリッジ版の場合

上 原 早 苗

昨秋ケンブリッジ大学出版局からハーディ小説の校訂版第一弾が刊行された。監修者は、現在カナダのウィルフリッド・ローリエ大学で教鞭を執るリチャード・ニームスヴァリ。彼は、オックスフォード・ワールド・クラシックス・シリーズの *The Trumpet-Major* の編纂者でもある。ニームスヴァリによると、今後も年3巻程度のペースでハーディの小説・短編集の校訂版を刊行し、2023年頃に *The Cambridge Edition of the Novels and Stories of Thomas Hardy* 全18巻（小説14巻、短編集4巻）の完結を目指すという。昨秋刊行されたのは以下の作品である。

Richard Nemesvari, ed., *Desperate Remedies*, ISBN: 9781107036925

Simon Gatrell, ed., *Under the Greenwood Tree*, ISBN: 9781107089020

Alan Manford, ed., *The Woodlanders*, ISBN: 9781107046504

ケンブリッジ版は小説の生成過程に関する解説が実に充実している。冒頭に各ヴァリエントの詳細な説明が付され、サブスタンティヴの異同は脚注に、アクシデンタルは巻末のヴァリエント・リストにそれぞれ記載されている。ハーディのように本文に手を入れ続けた作家の場合、異同は膨大な量にのぼる。ヴァリエントを校合しながら加筆削除を正確に転写するのは、神経のすり減るような作業だったに違いない。快挙という言葉が相応しい出版事業だ。

ハーディ小説の校訂版編纂の嚆矢といえば、クラレンドン版だろう。すべての本文異同が脚注に記されたクラレンドン版はハーディ書誌学の金字塔と目されてきたが、残念なことに、デイル・クラマー編纂の *The Woodlanders* とサイモン・ギャトレル編纂の *Tess of the d'Urbervilles* に限定されたエディションだった。その後、校訂版編纂の試みはオックスフォード・ワールド・クラシックス・シリーズに引き継がれたものの、軽量化が最優先されるペーパーバックの常として、異同の多くは記載されず捨象されることになった。その点では、パトリシア・インガムを監修者に迎えたペンギン版も同じである。ケンブリッジ版では、クラレンドン版に倣い本文異同がすべて記載されている。ニームスヴァリらもあくまでもアカデミックなエディションの編纂を目指したのだ。

だが、ケンブリッジ版とクラレンドン版の編纂方針は全く異なると言えそうだ。クラレンドン版の場合、ハーディ本来の文体とされる「ライト・パンクチュエーション」—植字工の介入・改竄により失われてしまった—を復元すべきとの信念が編纂者にあり、原稿が現存する場合は原稿

を底本としていた。またサブスタントィヴに関しては、基本的にはウェセックス版をハーディの「最終的な意図」の実現されたテキストと見做し、原稿にウェセックス版本文を落とし込んでいた。言い換えれば、原稿とウェセックス版を顕揚し、所謂折衷版（'eclectic edition'）を編纂するところにその特徴があったと言える。クラレンドン版の編纂者はハーディが残しえなかった「最善」のテキストを編纂者の力によって創り上げようとしており、その編纂方法は、作者の「意図」に寄り添いながら実際には編纂者の力を前景化するものだった。

それに対して、ケンブリッジ版は折衷版を觀念の所産として斥ける。*The Woodlanders* 編纂者のアラン・マンフォードによれば、現存する各ヴァリエントこそ、その時々読者に向けられた価値あるテキストであり、いずれも等価であるという。したがって、ハーディの「最初の意図」が実現された初版を底本に選定するけれども、初版を唯一絶対のテキストとして特権化する心算はないというのだ。またマンフォードは、脚注の異同を見れば、読者は「理屈の上では（'theoretically'）」各ヴァリエントを再構築できるとし、等価主義を支える異同の提示の意味と再現性にも言及する。そこにケンブリッジ版を統べる編纂の姿勢と文法があると言えそうだ。

勿論、「理屈の上では（'theoretically'）」という言葉は意味深長である。マンフォード自らが示唆するように、実際にはヴァリエントの再構築は不可能だろう。初版本文を読み、本文へ至る手入れと本文からウェセックス版に向かう手入れを確認し、すべての情報を統合しながら各ヴァリエントを再構築しようとするれば、並外れた記憶力だけでなく超人的な空間処理能力も要求されることになる。

そもそも脚注の情報を正確に読み取るのでさえ、なかなか大変な作業だろう。脚注はスペースに限りがあるため、簡潔な情報提示を目的として記号が使用されているが、記号化が進めば進むほど読者にとって解読しにくくなってしまふ。以前、クラレンドン版の編纂者ギャトレルが、「異同をあれだけ整然と提示したのに、友人にわかりにくいと言われた」と嘆いていたことがある。勿論、このわかりにくさは編纂者に起因する問題ではなく、スペースの都合上不可避免的に立ち上がってくる問題であろう。また、脚注がわかりにくければ、読者は脚注を参照せず小説本文しか読まなくなってしまうものだ。ウェセックス版本文を特権化するクラレンドン版の場合、仮に脚注が参照されなくとも、それは大した問題とはならないだろう。しかし、各ヴァリエントを等価と見做すケンブリッジ版の場合はどうだろうか。編纂者の「意図」が裏切られ、一つの本文が特権視されることになってしまうのだろうか。一抹の不安がよぎらないわけではないが、何はともあれ、*The Cambridge Edition of the Novels and Stories of Thomas Hardy* の刊行は一世に一度あるかないかの大事業だ。全集が多くの大学図書館で購入・利用されることを心から願っている。

## 「ハーディと私 その後」

筒井香代子

長年非常勤講師として英語教員を続けつつ、研究から遠ざかり気味のなか、なんとかハーディと関わってきた。大学での授業が受信型から発信型重視になってかなり経つが、近年一層その傾向が強い。そのような状況の下、出講している全ての大学で学生の読解力低下を痛感し、テキストでは可能な限り小説を選んでいる。しかし学生のライティング添削など頻繁に求められ、教員

としての負担も増え、講義と研究の両方で葛藤がある毎日だ。

そのような中で昨年は、ハーディ作品の深さや面白さを再認識した年でもあった。後期博士課程で学び、その後非常勤先となった大阪市立大学では、年に一回市大英文学会が開催される。その学会におけるシンポジウムで、発表することが決まった。その話をくださったのが市大の田中孝信先生である。田中先生はご専門のディケンズ作品で〈新しい男〉を論じられるので、私もハーディでということだった。お話しを頂く前に、共同執筆されている『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』で、田中先生による〈新しい男〉についての記述は拝読していた。正直、偏に自身の勉強不足により、それまで〈新しい男〉という言葉自体考えたことはなかったし、ましてやハーディ作品との関連で考察したことなどあるはずもなかった。

シンポジウムでは『日陰者ジュード』で発表することに決めた。先に述べた著書の中で田中先生は、以下のように記述されている。「〈新しい男〉というのは、〈新しい女〉の社会的・政治的解放の試みを支持し助ける、彼女の賛同者と理解すればよい。そして、世紀末小説のなかでは、彼女のロマンティックな恋人でもある。」また「〈新しい女〉と言えば、結婚に対する彼女たちの批判的な見解から判断して、結婚を否定し、自らの主張に賛同する男性との「自由な結びつき」を進んで求める者と一般に考えられている。」とあった。それゆえ、とりあえず〈新しい女〉を象徴するスーに感化される恋人のジュードを〈新しい男〉として発表することにした。

一方同シンポジウムで、ディケンズ、ハーディの他に、あともう少し古いブロンテ姉妹の担当者は渡千鶴子先生で、ゲストパネリストだった。ハーディ協会のみならず、関西の研究者が多い十九世紀英文学研究会でもお世話になっており、怠けがちな私を叱咤激励してくださる先生方のおひとりである。

学会開催日は11月30日で、発表が決まったのが5月ごろと時間に余裕があるにはあったが、よく存じ上げている田中先生や渡先生とご一緒する以上、下手な発表はできないとさぼり癖の強い自分に言い聞かせて取り組むよう努めた。そうして準備を進めていくうちに、ジュードだけではなく意外なことにフィロットソンにも〈新しい男〉の要素があることに気がついた。無論、先ほどの定義のようにフィロットソンは〈新しい女〉の「ロマンティックな恋人」ではない。それどころかスーに一度も愛されなかった男である。そのフィロットソンが、ジュード同様スーに感化され、彼女から別れて暮らしたいと強く訴えられた後、出ていかせる決心をする。友人のギリングガムとの会話で、ギリングガムがフィロットソンに向かって「女家長制だね！」とあきれほど、また自らを「スー顔負けの反社会的意見の持主」と認めるほどフィロットソンは考え方を変えているのだ。さらにジュードとスーが「一人が二人に分かれたようで」「考えれば考えるほど、すっかり二人の味方になってしまう」ことを、この友人に語りさえもする。既存の価値観や制度を否定し、「本能に従って行動する」ようになり、職を追われることになっても、彼らの最大の理解者であろうとするフィロットソンの〈新しさ〉には、今回のシンポジウムでの発表の機会がなければ、目を向けることなど決してなかっただろう。さらに発表直前まで両先生にも色々相談させていただき、的確なアドバイスを常にご教示いただき、シンポジウムに臨んだ。

シンポジウムそのものは、成功裡に終わった。今私はハーディにとっても感謝している。ハーディの作品は、研究を続けさえすればいつでも新しい発見の機会を提供してくれ、そして素晴らしい人との出会いを与えてくれるからである。

さらに今年は一層そう感じるようになった。新型コロナウイルスのせいでいきなりオンライン授業を余儀なくされ、使ったこともないパワーポイントなどで講義をしなければならなくなった。市大で独文、仏文、英文の3者で実施する西洋文学の講義の担当が決まっていた私は、ここでも『ジュード』で〈新しい男〉や〈新しい女〉を中心とした人物像を講義するつもりだった。どのように行ったらいいか試行錯誤しながら進めたが、その際もあらたな気づきがあっただけで

なく、試行錯誤の成果を学生の反応からも感じ取ることができた。どのような状況下でもハーディの研究だけは裏切らない。そう確信した私は今度こそ真剣に研究を続けていくつもりである。

## 「ハーディと私」

服部美樹

私がこれまで研究してきたのはハーディの小説のみで、研究領域としては狭い。「ハーディと言えば詩が重要では？」という意見があることも承知している。しかし、ハーディの場合、小説だけでも研究書や論文が豊富にあり、論文一つ書くにも、多くの先行研究を確認する必要がある。作品よりも批評を読む時間が長くなり、なかなか研究対象を広げる余裕がなかった。唯一の慰めは、ハーディに関する先行研究を読むなかで、文学や小説の研究全般に関わる様々な観点や研究手法を学べることがあり、狭い領域を研究していても何らかの広がりや得られた、という点である。

先行研究の多さに圧倒されながらも、ハーディの小説の研究が続けられたのは、ハーディの小説が面白いからである。学生時代のやり方そのままに先入観なしに作品を精読すれば、大抵ハーディは「面白い」し、その面白さは人に伝えるべきものであるように感じる。しかし、それを学会で受け入れられるような論点に表現し直すのは難しい。自分が見出した（と独善的に考えている）「ハーディの面白さ」を論文らしい形にするためには、何らかの枠組みが必要（理論のようなもの、あるいは先行研究の一群のようなもの）であるが、自分の論点をうまくはめ込めるような枠組みは簡単には見つからない。せめて何らかの影響力のあった先行研究と絡ませることがなければ、感想文のようなものになってしまう。こうして、とにかくその都度「これだ」と思うものを枠組みに採用して考えを発表してきたため、今振り返ってみても、自分の研究には全くまとまりがない。だが、ハーディのどのようなところを面白いと感じるか、という点では規則性のようなものがあると思う。なぜならそれは結局、個人的な好みが反映されているからである。

学問的にはどうでもよいような個人的な好みを論文にする意義、あるいはその方法についての考え方のヒントは、先行研究を読む中で芋づる式に得られることが多かった。例えば、David Lodgeの *Working with Structuralism: Essays and reviews on nineteenth- and twentieth-century literature* (1981) はハーディ関係のエッセイを含むのでよく参照したが、同書に所収の“Analysis and Interpretation of the Realist Text: Ernest Hemingway’s ‘Cat in the Rain’” が言及している2つのプロットの考え方は参考になった。これは Seymour Chatman が *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film* (1978) の第2章で述べている、プロットには2つの型があるという考え方である。問題を提示し解決することを主目的とするresolutionタイプと、問題解決ではなく状況を提示することが主目的のrevelationタイプの2つである。この説明を読んだとき、私は自分のハーディ観が整理されたような気がした。というのは、私がハーディの小説で面白いと感じるのはrevelationの要素であってresolution的な要素、例えばヒロインが最後結婚するかどうか、などの点にはあまり興味を感じていないことがはっきりしたのである。

また、ハーディやヴィクトリア朝とは一切関係のない講義や本からヒントが得られる場合もある。例えば、George Lakoff and Mark Johnsonの *Metaphors We Live By* (1980) やこの考え方を援用した論文などである。隠喩的な言葉の使い方を分析することで、その背後にある世界観を

推測できるので、作中人物の言葉や語り手の言葉に注意しながら作品を精読する意味を見出すことができた。

もちろん今でもうまく説明できないままになっている「面白さ」は残っている。たとえば、ハーディ小説における夜や闇の描写の面白さである。現代とは異なり、夜は基本的に暗い時代の作品であるから、ハーディの作品に夜や闇の場面が多いのは特別不思議なことではないかもしれない。しかし私はハーディの作品では夜の場面が面白く、かつ重要なのではないかと感じている。*The Return of the Native* に関しては、マジックランタンなどの当時の娯楽のイメージと関連付けて夜や闇の場面の面白さを論文にまとめたことがある。しかしそれ以外の作品については、今のところ、どうすればその面白さを説明できるのか、十分考えがまとまっていない。以前、谷崎潤一郎の『陰翳礼賛』を使えないかと思って読んでみたが、これと関連付けるのはこじつけだろうと思い、発展しなかった。結局今も、一読者として闇の描写が好きだ、というほかない。

闇の描写で好きな例を一つ挙げると、*The Woodlanders* の3章の始めで、Martyが夜中にドアを開ける場面がある。明るい室内から急に暗い外を見たときの様子が実にうまく書かれていて気に入っている。このような点に目が留まるのは、私が夜の暗い田舎で育ったせいかもしれない。つまり、自分自身の子供のころの記憶などがよみがえって、夜とか闇に郷愁を感じ、また、そのような場面を求めてハーディを読んでいるのかもしれない。しかし、仮にそのようなパストラル的世界への郷愁とともにハーディを読んでいるのだとしたら、なんとなく恥ずかしい。

今回、この原稿を書かせていただくにあたって、自分がハーディとどのようにかかわってきたかを改めて考えた。結局のところ、ハーディと関わってきた時間は長くなったが、研究は断続的でまとまりがなく、今でも無責任な一読者の域を出ていないことがわかった。

## 《シンポジウム予告》

### Thomas Hardyとnew realism

#### イントロダクション

永 富 友 海

1871年出版の『窮余の策』(*Desperate Remedies*)を皮切りに、以後長きにわたるトマス・ハーディの作家生活を潤沢に彩る彼の作品を特徴づけるのは、ときにジョージ・エリオットの作品と見紛われもした慎ましやかな地方生活のくすんだ風景を描くリアリズム風の装いを、暴力的に引き裂いてそこかしこから顔をのぞかせる‘grotesque’, ‘morbid’, ‘farical’といった要素である。60年代に人気を誇ったセンセーション・ノヴェルの模倣から始まった彼の小説作法は、その後もセンセーションリズムの血脈を失うことはない。それどころか、より一層不気味で異様な方向性へと逸脱していくのは、逆説的ながら、ハーディが哲学や科学、宗教といった時事的主題や現実の事象にきわめて敏感であったことと軌を一にしている。ハーディにおいて、リアリズムとグロテスクは対極ではなく同根であるという命題に、本シンポジウムでは3つの角度から迫ってみたい。まずはハーディ作品に接近するための基本的な文脈、すなわち当時の宗教的言説の布置関係を確認したうえで、ハーディ小説にしばしばグロテスクな悲劇もしくは茶番としてのプロットを提供するセクシュアリティの問題に着目し、最後にハーディの詩の定型性に見出された非／反写実的表現空間の模索を試みたい。

## ヴィクトリア時代の宗教思想

舟 川 一 彦

ハーディの作品の全般的背景として、19世紀のイングランド国教会内における思想の趨勢を、(どの程度整理された形で呈示できるか心もとないが) たどってみたい。

18世紀から国教会内に根強くあり、一般に理解されているようなヴィクトリア朝的道德観の基盤となった福音主義 (Evangelicalism)、1830年代にオクスフォードで隆盛を見たハイ・チャーチ、そして同じく1830年代から知識人の間に支持者を得たブロード・チャーチ (Liberal Anglicanism) の三派の三すくみの状況の中から、世紀後半に科学思想の進展によって不可避となった不可知論や、ハイ・チャーチの帰結としてのリチュアリズム (ritualism) が発生した事情を探る。

## もうひとつのリアリズム

永 富 友 海

ハーディにおけるリアリズムの問題を考えるにあたり重要な視座となりうるのが、彼のテキストのエンディングのありかたである。ハーディのリアリズムは、ヴィクトリア朝小説の定型であるハッピー・エンディング——結婚と相続のプロットの完成へと向かわない。換言すれば、ヴィクトリア朝小説のリアリズムがそもそもの前提とするところの人間の生存と繁栄というテロスを無効にするようなベクトルを内包してしまっている。19世紀小説が総じて描いてきた主題——世俗の社会における法と慣習が、個人の欲望と相容れないというジレンマ——をハーディも同様に取り上げながら、その背後にうごめく大きな力 (自然／文化、宗教／科学、機械論／目的論、因果律／偶然等々) のありようがつねに取り沙汰されてきたのは、死が生の結果ではなく目的となっているという、ハーディの「リアリズム」が孕むペシミズムのためである。

一方で彼が拘泥し続ける結婚 (法) の問題がナラティブのきっかけとなると、ハーディのリアリズム的嗅覚は、結婚の社会的側面に正しく反応しながら、同時に彼の決定的な関心は社会性とは別のところを彷徨い、テキストに穴を穿ってしばしば愕然とするようなグロテスクなリアリズム的側面を垣間見せたりもする。ペシミズム色のリアリズムに織り込まれたもうひとつの「リアリズム」とはいかなるものであるのか。その内実を探ってみたい。

## 詩人ハーディの自己形成：伝統と実験のあいだで

松 村 伸 一

イギリス文学の領域で、詩も書いた小説家、小説も書いた詩人は少なくないものの、それぞれの領域でそれぞれに高く評価されている詩人小説家となるとエミリー・ブロンテとハーディしか思い当たらない。とりわけ、小説家としての経歴と詩人としての経歴を意識的に切り分けた表現者となると、ハーディのほかいないだろう。小説家ハーディと詩人ハーディの間に、テーマやモチーフなどの共通点があることは言うまでもないが、小説家として培ったリアリズムの技法が通用しない詩の領域で、ハーディはどんな可能性を求めたのだろうか。

ここでは主に韻律論の観点から、19世紀末から20世紀初頭にかけてのイギリス詩というコンテクストのなかにハーディの詩を位置づけ、それが何を伝統として継承し、どんな実験を試みたかを考察してみたい。ハーディが詩の定型性に見出した新しい表現空間に立ち現れるのは、内在意志、死後の生、あるいはまた別の何かだろうか。



## 《特別講演予告》

### *The Well-Beloved* をめぐって

深澤 俊

この小説は名作に隠れて無視されてきた嫌いもあるが、ハーディの生涯を見ると、きわめて重要な位置を占めていると言わなければならない。小説のジョスリン・ピアーストンは、同じスリンガー島の出身のアヴィシ・カーロウに永続した魅力を認めて、三代にわたって執着するが、その愛は最後には裏切られ、かつて結婚しそうになったミス・マーシア・ベンコムが年老いて、やつれた姿で現れたのと再会し、結婚するという結末になっている。

ピアーストンはアヴィシの永遠性を追求しようとするが、これはシェリーを代表とするひとむかし前のロマン主義の特質だが、すぐあとのハーディの時代にはこれがほぼ消滅していた。この状況のなかで、代々見かけが似ている状態で伝えられるアヴィシは、ピアーストンから見て時代から消えつつある貴重な存在だった。ところがこの作品が *The Pursuit of the Well-Beloved* として1892年10月1日から12月17日にかけて雑誌 *The Illustrated London News* に連載された段階では、ハーディにとって『ジュード』を巡る世間の不評など厳しい状況があり、アヴィシにたいするロマンティックな理想像ははかなく消え去ってしまい、その代わりに現れたのは美しさのなくなった年老いたマーシアだった。結論としてハーディは、アヴィシ的な美の理想像に価値を見いだすのではなく、時間が経って頬はこけ、頭は白くなった、老化したマーシアこそ人生を生きてきた証しであり、そのことに尊敬の気持ちを抱くようにと読者に訴えるのだ。これは愛から出たものではないが、その結果生まれるものは、近代的な水道工事であり、換気の悪い家の改良工事である。つまり庶民的なレベルでの、実際的な社会改革で収まっていくのである。ここにはゲーテのヒントもあるが、カサグランデは、ハーディが自分の母親なり親族なりに連帯意識を持っていて、それが日常レベルの改良工事なり、故郷への回帰へと繋がっているとみる。ハーディの晩年に頻繁に同行してハーディの作品の舞台を写真に記録したハーマン・リーは、プロの文芸批評家と違って庶民的であるからこそ、ハーディと話が合ったという。これがハーディの感覚に近いもので、ジョスリンがアヴィシ、そしてマーシアに向かうのは、この一般的な連帯意識が濃厚なためと言えるのだろう。たとえアヴィシのなかに「永遠的な」価値を見いだしたとしても、それがシェリー的な絶対的な価値に高められるのではなく、老化などを踏まえても容認できる新たな価値の発見にこそ意味を見いだす。これこそが、ロマン主義崩壊以降のハーディのモダニズム的妥協と思われる。人生は、結局はそういう落ち着き方をするものだという、ある程度悲劇的なハーディの達観した人生観が、小説から詩への方向転換とも絡めて重要な要素となっていた。

## 《編集後記》

新型コロナウイルス感染症の広がりによって、私たちの日常はすっかり変わってしまいました。このような状況にあることが、いまだに信じられずなんだか悪夢を見続けているような感があります。加えて、自然災害の激甚化など、およそ自然というものに対して抱きがちな甘い感傷は私たちの自己満足なのかもしれません。ファニーのお墓に無残にもガーゴイルから雨水が激しく打ちつけるようなことが、日常いたるところで起こっているのでしょう。

遠隔授業という通常の授業よりも何倍も手間のかかる大変な授業をこなしながら、日々の各種委員会業務、さらに入試関連の業務等、見通しがつきにくくこれまでよりもはるかに忙しいにもかかわらず、今号に玉稿をお寄せいただきました先生方には心より感謝を申し上げます。巻頭の写真につきましては、再度今村紅子先生にお願いしました。物語のように、円環的に過去に遡り現在に近い時点に戻ることを心密かに考えておりました。最後になりましたが、編集を担当するにあたりサポートしていただきました皆様、中央大学生協印刷部の藤様にあらためて心より御礼申し上げます。

なお、次号は来年4月発行予定で、原稿の締め切りは来年2月20日です。論文、随筆は2,000字程度、短信、個人消息は500字程度です。どうぞ皆様、奮ってご寄稿ください。また、ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。お待ちしております。